



アイドル
だつて恋
する
を

あずま渡里



アイドルだって恋をする

あずま渡里

第一話

「お兄ちゃんお姉ちゃん、あとダチの皆、こんばんは！ 神楽蓮華かぐられんげですっ」

俺がアバター名を名乗って挨拶すると、画面に映るアバターが俺の表情を読み取って笑う。

途端にいくつものコメントが来るのに、俺は可能な限り返信をした。ちなみに兄姉とダチ呼びをしているのは、俺の配信を観てくれる視聴者さん達のことだ。

「今日は、プロデューサーさんの新曲です。りんPさん、いつもありがとうございます……お兄ちゃんお姉ちゃん、あとダチの皆！ 頑張って歌うから、聞いて下さいっ」

そして俺は竜胆君が用意したアバターで、竜胆君の作った歌を歌って配信した。

ちなみに、配信しているのは俺の家からではなく——六本木にある、灰谷家からである。

※

突然だが、俺・花垣武道には物心ついた頃から前世の記憶がある。

不思議な力を得た俺は、大切な人達の為に何度も何度もタイムリープした。そして最後はもう一人、マイキー君もタイムリープし、一緒に奔走したことで誰も寿命以外では死なせず、幸せな未来を手に入れた。俺は最後、ヒナと子供、そして孫達に囲まれて大往生した。

（ただ、単純に生まれ変わりがあって言う……俺はもうすぐ中学卒業だけど、スマホとかSNSは普通にあつて。ただ、価値観が違うから……転生パラレル？）

昔、勤めていたレンタルビデオ店や映画からの知識である。

そう、全くいない訳ではないが、今のこの世界では『不良』よりも『アイドル』に人気があり——かつての仲間達、具体的に言えば東亘・天竺・黒龍の者達が全員、アイドルをやっているんだ。

（中学に入ったら、歩く不良辞典って名乗ってた山岸が、歩くアイドル辞典って公言してたんだよな……それ、ただのドルヲタじゃねーか！）

心の中でツツコミを入れたが、不良に憧れることがなかったおかげで、奴隷となり喧嘩賭博に巻き込まれることはなかった。そして山岸の勧めるままに、アイドルであるマイキー君達を観て——格好良いのは勿論だが、とにかく平和で泣けてしまった。それを感激したと思われ、布教用のCDやDVD、雑誌を渡されたのは余談である。

インタビューなど読む限り、俺と違って他の皆には記憶がないようだ。すっかり親目線、いや、可愛いとしか思えないので孫目線で皆を見ているうちに俺にはある想い、いや、ある欲が生まれた。

（遠くからでいいから……マイキー君を一目、直接、観たいなあ……闇堕ちしてないかな、大丈夫かな……）
芸能人なので、会って話をするのは無理だ。

でも、コンサートなら——そう思ってた親にも協力して貰い、三月の武道館ライブに応募したが残念ながら全敗した。落ち込む俺に、山岸が悪魔のように囁いた。

「そんなに会いたいなら、出待ちすれば？」

「……出待ち？」

「おう、ライブ終われば帰るだろ？ 同じこと考えるファンは多いだろうから、近くで話せたりはしねえけどな。会場とか人によつてはNGだけど、武道館と東亘は大丈夫な筈だぞ？」

「そっか、一目見るだけなら……ありがとうな、山岸！」

お礼を言つて一応、夜の外出になるので親に許可を取る。前世の記憶があり、親に迷惑をかけた負い目があるので、今生では報連相を出来る限り徹底しているのだ。

そして参戦は出来ないが、せめてグッズは買おうと開場前にやって来た俺の日常は——この日から、予想外の方向へ変わることになる。

※

「あー………帰りてえ………」

その日、俺・灰谷蘭はぼやいていた。アイドルグループ『天竺』のリーダーであるイザナから、東卍のチケツトを二枚渡されたからだ。

そう、二枚。本来なら弟である竜胆も一緒に予定だったが、風邪で高熱を出して寝込んでしまったのである。しかも、俺はそれを口実にサボろうとしたのだが、当の竜胆からセトリリストを教えて欲しいと懇願されてしまったのだ。

(あいつ、男性アイドルに妙な思い入れがあるからな)

自分も芸能人でありアイドルのだが、竜胆の好みはもつと『ポップでキャッチー』な奴らしい。東卍も違う気がするが今、売れている男性アイドルの中ではまだイメージが近いらしく今日のライブも楽しみにしていたのである。

(思い入れがあり過ぎて曲作ったり、何かガキんちよのアバター作ったりしてるもんな。声にはこだわりたいたか言つてお披露目はしてねえけどアレ、誰に動かさせるんだか………ん?)

そこまで考えたところで、俺の目が一人のガキんちよのところで止まった。知り合いではない。

だがソイツは髪の色こそ違うが、逆に髪色以外は竜胆の描いたアバターによく似ていた。不思議な偶然に、俺はしばしソイツを観察した。ソイツは、ライブに来たのだと思ったが——買物が終わっても、会場に入ろうとはしなかった。けれど、帰ろうとしないところを見るとチケット戦線に負け、せめてと買物をしてこれから出待ちすると思われる。

そう予想した刹那、俺はソイツへと近づいた。そして左手を掴んで持ち上げ、驚いて振り向いた少年に近づくと笑った。

「えっ!? な、何……って、灰谷蘭っ!?」

「フルネームかよー。ってか、お前の名前は？ チケットいらねえ？ 一枚、余ってるんだけどー」

「し、失礼しました！ 花垣武道です……って、いいんですか!? あの、お代！」

「ガキが遠慮すんなー？ ほら、タケミチ、行くぞー」

「灰谷さん!?」

「竜胆もいるから、下の名前呼べー？」

「へ？ あ、あの、蘭さん？」

「駄目ー、他人行儀ー」

「他人ですよ!? じ、じゃあ、蘭君でっ」

「えー？ タケミチ、冷たいー」

俺の言葉に一々反応し、けれど芸能人だからと媚びてこない。チケットがないのに、諦めきれずに会場まで来ている辺り東卍のファンだとは思うが、俺の方が何倍も格好良いので押し変させようと思った。

……だが二人で関係者席について、ほどなく始まったライブを観出して。

周りの歓声により、隣にいる俺くらいしか気づかなかつたが——東正の歌を口ずさむ声は、竜胆が何度も何度もくり返し言っていた声だった。

“女とかガキみたいに甲高いのじゃなくて”

“でも、耳に残るし心地好いやつ”

“ガキみたいなこと言っても鼻につくんじゃなく、ストーンと落ちちやうような”

大きな声で歌ってる訳じゃない。けれどステージを観て涙ぐみながら、壇上のマイキー達を応援するように歌うタケミチから俺は目が離せなくなり——ライブ終了後、帰ろうとするタケミチの手を再び掴んで、六本木の自宅まで連れていった。

そして、少しは熱が下がったのか身を起こし、水を飲んでいる竜胆に俺は言った。

「なー、竜胆？ お前のアイドル、コイツでどーだ？」

第二話

俺・花垣武道にとつて、この世界はご褒美でしかなかった。

（家庭環境なんかは、今までと変わらないみたいだけど……誰も、死んでなくて。イヌピー君家の火事だけはちよつと手出ししたけど、真一郎君がいて不良じゃなくてアイドルになったから……彼がマイキー君とイザナ君を引つ張ってくれたから、ああやって光の中で生きている）

そう、元々は真一郎君がスカウトされてアイドルとして一世を風靡し。引退後、所属していた事務所を引き継いで社長となり、弟達やその友人をスカウトした。おかげで、今では男性アイドルとくれば『佐野エージェンシー』と言われるくらいだ。

そんな『佐野エージェンシー』に所属しているのは、マイキー君がいる東京社会。大寿君率いる黒龍^{ブラックドラゴン}。そして、イザナ君が所属している天竺だ。それぞれ、歌・ダンス・バンドの格好良さをウリにしている。

（真一郎君が頑張ってくれたから、俺はこうして安心して皆を観ていられる。応援していられる）

そのことが嬉しくて、俺はCDやDVDを聴きまくり観まくった。だから、こうしてライブに来ても皆、知ってる曲などで安心出来るし、応援の気持ちを込めてこっそり歌うことも出来る。

（これだけの歓声だから、マイキー君には……皆には、聞こえないだろうけど）

ただ、視線の先には笑って客を煽るマイキー君がいて。

平和だ、と心の中でしみじみしつつ、マイキー君が元氣そうなことに安堵していたんだけどアンコールも含め、

ライブが終わったところで蘭君に会った時同様、腕を掴まれて驚いた。

「タケミチ、とーり♡」

「へっ？」

「あのさー？ これから俺んち来て、今のライブのセトリ弟に教えてやってくれねー？ 頼まれたけど俺、全く興味ねーから覚えられなかつたんだわ……チケット代気になるなら、それでお返しでいーぞ♡」

「セトリ？ あっ……」

今、一緒に聴いてたよなと思つたが、それは俺が皆に興味があるからで。別グループで興味がなければ、聴いててもよく解らないだろうと思ひ直した。あと、それがお返しになるのならむしろ臨むところだ。

「解りました！ 俺なんかで良ければ、喜んでっ」

「なんかとか言うなー？ それこそ、俺が声かけたんだから」

蘭君の言葉に、俺は目を睜つた。最終軸で天竺を傘下に加えた頃、似たようなことを蘭君に言われたことがあつたからだ。

「なんかとか言うなー。代理は、俺らの上なんだからよー？」

記憶はないしお互いに暴走族にいたこともないが、今までの世界と同じなんだと実感し。今日はマイキー君の出待ち目的で来たが、蘭君のおかげでライブを無事に観ることが出来たのでこの後は蘭君、そして風邪で寝込んでいると言う竜胆君に恩返しすることにした。

「……はいっ！」

だから元氣良く返事をし、俺は蘭君と一緒に六本木の灰谷宅へと向かった——高価そうなタワーマンションに

到着した時はビビって、腰が退けてしまったけど。

※

俺・灰谷竜胆がMacを購入したのは、曲作りがしたかったからだ。まあ、Windowsで出来ない訳ではないが、そもそもレコーディングスタジオで置いているのがMacのことが多いので、最初からMacを選んだのである。

そして、曲作りを始めた俺だった——いつしか天竺用の曲の他に、可愛い感じのアイドルソングを作るようになった。最初、兄ちゃんには女性アイドルの曲かと思われたが、違うのでそこはついムキになってしまった。実は男性アイドルのイラストを描いた（一枚目はノートに鉛筆でのラフ描きだった）のは、元々は兄ちゃんに説明する為だったりする。

「可愛いけど！ ポップでキャッチーなのが良いくけど！ 女じゃねーのっ、可愛くてもこういう男が、歌うのがいーんだよ！」

「男ってかガキじゃん」

「兄ちゃん、うるせー！」

「俺に反論するとか、ガチじゃねえか……てか、絵？ 描いたなら竜胆が歌うの？」

「……俺じゃねえ。こだわるからこそ、俺の声じゃねーんだよ……っ！」

「あ、はい……えつと、人工音声とかに歌わせるとか？」

「それも、ちげえんだよ……チクシヨウ……」

「え？ 竜胆、泣いてる？」

極悪非道な兄ちゃんに心配されるくらい、語ってしまった俺である。

ただ、自分の理想とする男性アイドルが、芸能界で通用するかと言うとうそじゃない。女性アイドルは可愛いが許されるが、男性アイドルに求められるのは『イケメン』『格好良い』なのである。

そこで俺が目をつけたのは、VTuberだった。

アニメキャラのようなアバターを使って、配信する。その内容の一つに歌枠と言つて歌を披露するものがあるのだ。

（最初は視聴者集めるのに、カバー曲でやるとしても……オリジナル曲も配信出来るから、そこで俺の作った曲を……いや、でもまずは歌える奴探さねえと）

……そう思っていた俺の前に、兄ちゃんが『アイツ』を連れてきた。

「なー、竜胆？ お前のアイドル、コイツでどーだ？」

「はい？」

「っ!？」

「んじや、タケミチー。竜胆に、東卍メドレー歌つてやつてー」

「えっ!? セトリを教えるだけじゃないんですかっ!？」

あまりに、俺が描いたアバターに似すぎていて最初、熱が見せた幻だと思った。

違うと気付いたのは、兄である蘭に無茶振りをされて青ざめたからだ——観念したのか、今日のライブの曲のメドレーを歌い出したのに、その理想通りの声に俺は下がっていた熱が再び上がるかと思つた。

（すげえ、良い喉してやがる……マイキーのキー、楽々歌つてるじゃねえか）

（これ、もしかしたら俺ら天竺の歌も、黒龍の歌も歌えんじゃね？）

（つてか、可愛い……笑つて歌つてるの、可愛い……っ!）

うっとり聞き惚れていると、兄ちゃんにタケミチと呼ばれていた奴が最後の一節を歌い終えたらしく、ペコリと頭を下げた。そしてドヤ顔をしている兄ちゃんに内心、ムカつきつつもそれより前に俺にはやることがあった。

「頼む！ 俺の『可愛い』を、一緒に作ってくれっ！」

「……えっ？」

ベッドから降り、タケミチに近付いてその手を取って、俺はそう言ったのだった。

第二話

何故か蘭君に竜胆君のアイドルになるよう勧められて、竜胆君には可愛いを作ろうと誘われた。一体、どういふことなんだろう？

首を傾げる俺の前で、竜胆君が風邪をひいているのに興奮した反動か突っ伏してしまう。慌てたが、そんな俺に竜胆君にスポーツドリンクを渡しつつ蘭君がMacを、正確に言うところ描かれたイラストを見せてくれた。

「……えっ？」

金髪の俺がいる。

いや、タイムリープをしていた時は不良に憧れて、金髪にしていたがこの世界では髪色を変えていない。それなのに、イラストに描かれた俺はリーゼントにこそしていないが金髪だ。蘭君、あるいは竜胆君には前世の記憶があるんだろうか？

一瞬、ヒヤツとしたが先程までの竜胆君、あるいは今の蘭君を見てるとどうやらそうではないようだ。行ったことはないが知っている気がするような、デジャヴみたいなものかもしれない。タイムリープや転生パラレルがあるのだから、何でもありだろう。

そう思っていると、蘭君が笑いながら口を開いた。

「タケミチさー、VTubeerって知ってる？」

「え？ あ、はい。アバターを使って、顔出しせずに配信する人達のことですよね？」

「竜胆さー、このイラストをアバターにして、タケミチに男性アイドルV Tuberとして配信してほしいんだよなー♡」

「……………はい？」

「大丈夫ー、顔出しはしないからー」

「いやいやいや！ 俺に激似じゃないっすか!？」

「大丈夫大丈夫」

「何がどう!？」

「四月から通おうとしてたの、通信制のネットコースなんだろう？ クラスメイトと会うことないし、配信あるからここに住めばセキリティ的にも万全だしー♡」

そんな蘭君の言葉に、俺はピキツと固まった。とても、何となくやあてずっぽうで言える内容ではない。

「……………あの、何で俺の進路、知ってるんですか？」

「兵隊に調べさせたー」

「不良なんですか!？ それとも、反社!？」

「違う違うー。俺らのファン兼スタツフのことー」

「ネーミングの治安が悪い!」

「タケミチは、ツツコミのキレがいーね♡」

にここに、にここに。笑顔での言葉は、色々ともなかつた。

とは言え、事実ではある。一回目では、中卒のフリーター。一番最近の前世では高卒後、専門学校で学んで映

画監督になった。そして、この世界ではどう過ごすかと思ったところで俺は思った。

(通信制なら、課題や試験をクリアすれば時間が作れる。可能な限りバイトを入れれば、推し活もはかどる！)

前世では皆を救え、夢だった映画関係にも進めた。すっかり満足しているので、今生ではアイドルになった皆を応援したいと思った。

(応援したい中には、確かに灰谷兄弟も含まれるけど……でも、同居となると逆に負担になりそうだし) そう俺が思っていると、心を読んだように蘭君が言ってきた。

「V T u b e r になつてくれるなら、バイト代弾むぜー？」

「え」

「気になるんなら、そうだなー。収益化した時に、売り上げから返して貰うってのは？」

「……売り上げ出なくても、絶対、バイトとかして家賃や光熱費分は返しますから！ あ、親の説得は協力して下さい！」

「勿論♡」

「兄ちゃん、すぐいいトコ取りするっ！ ……ゲホッ、ゴホゴホッ」

「竜胆君!? 無理しちや駄目ですよ！」

「……大人しくすつから、次は天竺メドレー頼む……」

「子守歌にしちや、激しくないっすか？」

あつという間に決まった話に、竜胆君が俺が思ったのとは違うが物申ししてくる。

とは言え、本調子ではないらしく咳込むのに慌てる、何故だか歌のリクエストをされた。思わずツツコミを入れたが、潤んだ紫色の瞳で継るように見つめられたのに観念して、竜胆君と俺と同じく竜胆君の枕元に座った蘭君に、俺は今度は天竺メドレーをアカペラで披露したのだった。

※

兄ちゃんの行動は、早かった。その日の夜には、送りがてらタケミチの家に行つてタケミチの両親を丸め込み、数日後にはタケミチを灰谷家へと連れて来た。

もつとも、俺も何もしていなかった訳じゃない。空き部屋をタケミチ用に手配したり、配信用の部屋を用意したりした。そして引越しが終わり、一段落ついたところで俺は配信用の部屋にタケミチと、興味津々で付いてきた兄ちゃんを招き入れた。

今のV T u b e r は、端末にWebカメラと専用のソフトさえあれば、イラストの目や口を動かすことが出来る。そう、今、タケミチと同じように動くアバターみたいに。

(俺の描いたイラストが、動いてる……可愛いつ！)

金髪青い目のアバターに感動しつつも、俺は「すげえ！ 動いてるっ」と声を上げているタケミチを見てちよつと冷静になれた。そして、横でニヤつく兄ちゃんに内心、ムカつきながらも説明を始めた。

「慣れればリアルタイム配信もありだけど、まずは撮影配信だ……とは言え、その前にやらなくちゃいけないこ

とがある」

「？ 何ですか？ 竜胆君」

「アバターの名前と、設定だよ。自己紹介動画とか、SNSで必要だからな」

「だから、名前は蓮華れんげだろー？ 俺らの弟分なんだからよー」

「兄ちゃん、しつこいつ」

「……レンゲ？ あの小さい、ピンクの花ですか？」

「それは、レンゲソウ。俺が言ってるのは、睡蓮。ハスの花に似たヤツな……俺が蘭で、弟が竜胆なんだから、弟分は蓮華だろー？」

「あ、ら行で花つながりですか？」

「正解♡」

「竜胆君？ 他に候補ってありますか？ 逆に本名に被ってないし、俺、その名前で良いですよ？」

「ご機嫌な兄ちゃんを見て、タケミチが言う。兄ちゃん発案なのは面白くないが、確かに俺らの弟分みたいな名前なので頷くことにした。」

「……じゃあ、神楽蓮華かぐられんげで。俺も『灰谷竜胆』だって名乗る気ねーから。お前は、俺ってプロデューサーに言われてアイドル目指してる設定な」

「はい！ って、何かカッケー名前ですなっ」

「別に。灰の類語に灰神楽ってあるから、それから取っただけ……アドリブはキツイだろうから、原稿は作ってある。今日は自己紹介動画と、あと歌みた動画、四パターン撮るぞ」

「四？」

「東卍と黒龍と天竺、各一曲ずつ。あとは、俺のオリジナル」

「……すごいっ！俺、頑張りますねっ」

「良かったなー、竜胆♡」

「兄ちゃん……おー、せいぜい励めよな」

タケミチと、その表情の動きに合わせて『蓮華』が言うのに、からかうような兄ちゃんを軽く睨みつつ、俺はニヤけるのを堪えながら答えた。

……ただ、俺はタケミチのポテンシャルを甘く見ていた。

俺の予想通り、タケミチは三グループの曲を完璧に歌いこなした上、俺が書き下ろした歌も可愛く歌い上げたんだが——そんな『蓮華』の動画がバズり、当人であるマイキー達の目に留まって、次々と沼に落とすことになったのは完全に予想外だった。

アイドルだって恋をする

発行日 2023年12月15日

著者 あずま渡里

<https://www.pixiv.net/member.php?id=3229042>

連絡先 contact@rainbow.sakura.ne.jp

印刷 シメケンプリント / かんたん表紙メーカー

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
